

ら決して食物を粗末になさつてはなりませんよ。

(をばり)

不思議なおみやげ

とよ子

むかし〜ベニスと云ふ所に一人の商人があまりま
して此人に太郎と云ふ一人の腕白な子息が居りま
した。或時お父さんは商ひで遠くの國へ行かねば
なりませぬので旅のお支度をして居らつしやる所
へ太郎が遣つて來まして、いつもに似氣なく「お
父さんいつていらつしやい」と申したのでお父さ
んはアイヨ、歸りにはおみやげを買つて來て上げ様
かな。何がほしい？」とお云ひ掛けになりました
から太郎は喜んで「お父さん何うか日本一の不思
議なおみやげを頂戴！」と申しました。
「ヨシ〜日本一所か世界一の不思議なおみやげ
を買つて來て上げ様、けれどお父さんのお留守中

はかとなしく母様の言ふことをよく聞かなければ
上られないよと云つて、お出掛けになりました。
太郎はお父さんのお留守におとなしくして居まし
たらうか世界一の不思議なものは見付かりました
かしら。お父さんはだん〜行つて透〜或町に
來ました。御用もあらかた濟んだので、さて是か
らおみやげの不思議なものを探したいものだ
と彼方此方眺めながら行きますと向ふから一人のお
爺さんが來ました。お父さんは

「モシ〜お爺さん私は子供に世界一の不思議な
ものをおみやげに買つて居つて遣りたいのですが
何かよいものはありますまいか」と尋ねますと
「それはよいものがある、私と一所にかいでと云
ふので着いて行きますと町はづれの或一軒の家に
入りました。家の中にあつて色々話をして扱て不
思議なものを早く見せて下さいと云ふとお爺さん
は

「あ、丁度お晝になつたから御馳走をし様」と大き

なほ鍋にお醬油やらお砂糖やら入れて頓がて煮立つた時に窓を明けて庭に遊んで居た鷺鳥を呼びました。鷺鳥はガガと云ひながら入つて來ました。スルトお爺さんはお商人の方を見ながら

「是が世界一の不思議なものだよ」と云ひますから商人は承知しません、

「お爺さん、是は鷺鳥でせう此様ものは不思議でも何でもありませんと云ふとお爺さんは

「所が不思議なんだから見てお居でと云ひながら鷺鳥に向つて

「サア此中にお入り！」と云ひますとは不思議鷺鳥は一人でお鍋の中へ入りましたので流石の商人も感心して

「何とまあ不思議な鷺鳥があるものだ」と思つて居りました。そこでお爺さんは

「サア、商人さん、お腹が飢つたらう、早くお上り、私も食へやう併し斷つて置くがね、骨を食べてはいけないよ、みんな此處へ丁寧に出してお呉

れと、云ふので先づ一々食べて見ますと何とも云へないおいしい肉で、それを頬ぺたが落ちそうにおいしいものでした。遂に皆食べてしまつて骨がすつかり集まりましたのでお爺さんは、骨に向つて恰で生きたものに云ふ様に

「サアモ、いゝから庭へ行つてお遊び！」と云ひますと今迄皿の上に積んであつた骨がむくむくと動くかと思つるとの通りの鷺鳥になつて机の上を飛び居りて庭へ行つてしまいました。商人は此有様を見て驚いたの、何のつて、大變な驚き方で

「ヤツ、死んだ鷺鳥が生きた。是は不思議だ世界一の不思議だ」と我知らず叫びました。ソコで商人は此鳥を買つて歸つて來ました。家へ入ると太郎が飛び出して

「お父さんお歸り、とお辭義をするお父さんはニコとして

「ハイ只今お留守中はおとなしかつたかね、お約束の御ほうびを持つて來たよ」とおしやつて例の鷺

鳥を出しました。處が太郎は不平で、

「お父さん世界一の不思議つて是ですか。是は鷺鳥じやありませんか。つまらないなあ」と云ふとお父さんは「所が其が不思議なんだから面白よ」と云ひながらお母さんや番頭や子僧や下女やらを皆呼び集めてお爺さんの爲た通り鷺鳥を以て御馳走をしました、そして骨を出させて

「サアモーい、から庭へ行つてお遊びと云ふと鷺鳥は鷺鳥の骨はムク」と起き上つて元の通りとなり庭へ行つてしまいましたので、太郎は大悦び是は面白いと云つて躍つて悦んで居ました。此様にお父さんは約束の通りよいおみやげを下さしましたがお父さんはお父さんのお留守の時は誠に腕白で誰の云ふことも聞かず、仕方がなかつたのです。

丁度其翌日お父さんがまたお留守になつたので太郎はソロソロ腕白を始めました。先づ近所の仲間

の暴れものを五六人連れて來まして臺所から大鍋

を持て來て、お汁をこしらへて

「オイみんな〜見ておいで僕の鷺鳥はネ入レと云ふと此鍋の中へ一人で入るよ、そして煮へたら食べてそれから後の骨を揃へて、モーイ、ヨと云ふとチャンと元の通りになるのだよ」と云ひますので大勢の子供は「ソレは面白いな、早くおしよ」と一生懸命見て居ました、頓がて太郎は鷺鳥を呼んで來てお父さんのした通り

「サア此中にお入り」と云ひましたが鷺鳥は一向入りません、太郎はヤツキになつて早くお入り」と云ひましたが怪げんな顔をして何處を風を吹くかと云ふ風です、かんしやく持ちの太郎は忽ち腹を立て、

「此奴入らないか」と云ひながら鍋の蓋で力一杯鷺鳥の背中を打ちました。が是は不思議鍋蓋はピタリと鷺鳥の背中に吸い付いてしまつて放れませんそして太郎の手も鍋蓋に吸い付いたがり放れませんので、鷺鳥がガ、〜と云ひながら臺所から逃

げ出すと太郎は「あーあ、」と云ひながら引張られて行きます。スルト見て居た一人の子供が飛び出して太郎の帯際とつて引き戻そうとしました。が、是も吸い付いてしまつて放れ、ばこそ、太郎と一所に矢張りあゝと云ひながら外へ引づられて行きました。是は大變だと思つて外の子ども一どきに掛りましたが是もいけません。皆吸い付いてしまつてまるで芋虫コロコロか子を取ろの様に珠々つながりになつてわー泣きながら引っぱられて行きました。此騒ぎでお母さんも番頭も子僧も出て来ましたが、つかまらうものなら誰れでも彼れでも皆くつついてしまひますので困つて居ましたが、鶯鳥は平氣で大勢の子供達を引つぱつて臺所からお庭、お庭から往來へ出てだん々々町の方へ行きますので町では大さわぎ「ヤア、面白、面白」と往來の人はやして居ますスルト向ふから歸つて来たのはお父さんです。お父さんは此様を見て驚いて「是は一体何うしたん

だ」と云ひながら鶯鳥の首を捕へると皆のくつ付いて居たのがばらばらと放れました。ソレで遂々太郎の腕白がお父さんに知れて太郎は大層しかられましたので是からはおとなしいよい子になりましたとさ。めでたし、めでたし

おはなし

七、狐と山羊

筑紫の媼

或日一疋の狐が井戸に落ちて出られないで困つて居ると、丁度通り合した山羊が見付け出して「大將、井戸の水は甘いかね」ヤ結構だよ早く来て呑まないか」山羊は深い考もなく飛びこむと、狐は之を踏臺にして上に飛び上り「さよならありがたうそはあんまりい、所ぢやないよ風をひきたまふな」と言ひ捨て、行つてしまひました。何と憎らしい狐ぢやありませんか、悪者には用心しなればなりません。

八、御醫者様

昔上手な名高い御醫者がありました。或晩一人の老婦人が来まして「先生どうか息子の病氣をなほして、いた、きたうござります」何病ですか」はい私の息子はどうも泥棒をして困りますからどうか根性のなほります様に願います」御醫者様はしばらく考へて居りました。やがて或丸薬を與へてかへしました。あとで門人が「先生、泥棒につけるのは何といふ薬でござりますか」とたづねますと「あれか、あれは肺を乾かす薬であれを飲むといつても咳をするから人の家へ忍びこむ事ができない、其中に悪いくせもなほるだらう」